

丸岡藩騒動記 作造の仇討 第二部

駆け引き（２）（P21～25）

本多織部の怒りは常軌を逸していた。手当たりしだい、それが酒杯さかずきであろうと、皿、飯碗であろうと又八が閉めた襖に向かって投げつけた。膳さえ投げた。投げるものが無くなると、いきなり抜刀し襖を断ち切った。

「誰が漏らした！誰が裏切ったのだ！」叫びながら刀を振り回した。異様な行動に危険を感じた寺田、由村よしむらは立ちあがり座敷から離れようとした。

「寺田、お前が漏らしたのか！由村、お前か！なぜ逃げる、戻れ！」と怒鳴る。目は血走り、息が荒い。正気を失くしている。このままでは刃やいばが我が身に向けられる。とにかく落ち着かせねばならぬ、寺田は席に戻った。

「御家老、刀を収められ！由村もそれがしも御家老とは一蓮托生、裏切るわけがございませぬ」と、言う。由村も続いた。
「疑いなさるか。ならば縁を切りますぞ！」と、言う。

その言葉に織部は怯ひるんだ。宗一郎が駆け付けた。

「父上、怒りを収めくだされ。刀を・・・刀を渡しくくだされ。お味方に狼藉があつてはなりませぬ」

「寺田様、由村様、父の無礼許して下さい」息子がひれ伏して詫びる。彼はひれ伏したまま「許してください」と言い続ける。その姿を見つめていた織部は我に返った。彼等が離反すれば味方は堰を切って、又八陣営に走るであろう。激情に任せての愚かな振舞いは我を破滅させる。

「宗一郎、刀を取れ」
冷静さを取り戻した彼は刀を息子に渡した。
「済まぬ。お主たちは腹心の友、決して疑っているわけではない。又八への怒りが我が正気を失わしたのだ。雑言、許してくれ」と侘び、座に戻った。

「誰か酒を持て！」宗一郎が大声で呼ぶ。郎党が散乱している部屋を片づけ、襖を取り替えると、女中が酒を運んできた。

其々がやり場のない怒りを胸に収め黙って飲んでいて。気まずい空気が流れている。不味い酒である、だが飲めば酔う。酔えば気が緩む。由村が口を開いた。
「なぜ又八が知っておるのだ。内通者がいるのか。いったい誰が・・・」

再び気まずい空気が流れた。それを打ち消すように寺田が応じた。
「否、それはおるまい。伏木（権八）、小枝（五郎兵衛）、下枝（弥右衛門）、（寺田）甚左衛門、誰ひとりとして裏切るような男ではない」
「だが、秘密は漏れている」由村は納得していない。

「寺田の申す通りだ。裏切り者はいない、だが漏れているのも事実だ。とすれば、奴の配下が絶えず我等を見張っているとしか考えられぬ」織部が言う。
「それしか考えられぬが、しかし我等も警戒を怠ってはいない。見張られていれば気配を感じず。だが、その気配はまったくくない」由村が言う。

「見張りが武士ならば容易にわかる。だが武士とは限らぬ。商人、百姓かも、酌女かも知れぬ。駕籠かきかも、坊主かも知れぬ。あるいは郎党のなかに^{ひそ}潜んでおるかも知れぬ」そう言うとき織部は腕を組んだ。
（至る所で見張られている。あ奴たちは家臣のみならず商人百姓さえも取り込んでおるとしたら、防ぎようがない）

「それであれば、今日のことも合点がゆく。周りは敵ばかり、知らぬは我等のみということか」寺田はため息をついた。
「迂闊に動けぬということか。これでは藩政は又八一派に牛耳られるまま、我々には為すすべがない。何か手を打たねば・・・」由村が呟く。

織部は腕を組んだまま、考え込んでいる。ややあつて口を開いた。
「とにかく飲もう。いい思案が浮かぶかも知れぬ。宗一郎、酒が足りぬ。運ばせよ」酒を運んだ女中たちに一通り酌をさせて下がらせた。後は各々が手酌で飲む。相変わらず無言で飲んでいる。
（まずい、まずい。このままでは皆の気持ちが離れてゆく。手を打たねばならぬ。寺田、由村を納得させる方策を示せねばならぬ）織部が口を開く。

「家中の大半は又八一派と思わねばならぬ。領民もそうであろう。所詮、奴の甘言に惑わせられておるのだが、いまさら^{くりごと}繰言を言っても始まらぬ。今しばらく

くは敵に乗ぜられぬよう、軽率な行動は慎まねばならぬ。お主たち、皆に動くなと伝えてくれ。必ず儂が手を打つ、それまで動かぬよう徹底させてくれ」との織部の言葉に寺田が反応した。

「妙手がございますか」

「例えて言うなら将棋だ。勝負は王将一枚で決する。手持ちの駒をすべて失っても王将さえ奪えば勝ちだ。又八らが家中を押さえても殿が我が手中にあれば、如何ようにも手は打てる。重^{しげます}益公の名によって 政^{まつりごと}をおこなう。異を唱えることは許されぬ。又八といえどもできぬ。従わねば逆臣として誅殺するのみだ」

「殿が御家老に心を許されておるのは存じておりますが、遊興のみに執着される御方ござる。とても 政^{まつりごと}に心に向けられるとは思いません」と、寺田が言う。

「その方が都合がよい。儂はこれまで以上に殿に遊興をお勧めする。歓心を得る為にな。その上で我等が傀儡となっていていただく。又八が家中の者を意のままにするなら、儂は殿を意のままにしてみせよう」織部の言葉に二人は納得した。否、納得せざるを得ない。家中の大勢が相手に傾いている今、それが唯一の方策であろう。

「寺田殿、殿のことは御家老にお願いしようではないか」由村が言うと、寺田は頷いた。もはや退くことは出来ぬ。一蓮托生である。覚悟を決めた二人は酒を酌み交わした。彼等が屋敷を出たのはそれから半刻後であった。

同じ頃、太田又八の屋敷に主だった同志が集まっていた。盟友・本多^{けいぶ}刑部（家老）、本多^{げんごえもん}源五右衛門（家老）、中久喜^{なかくきすけのしん}助之進（家老）、大河内^{かくざえもん}角左衛門（武頭）、奥平^{はんざえもん}半左衛門（奉行）、林伊^{いえもん}右衛門（目付）、他に又八の腹心、平岩^{かんざえもん}勘左衛門、太田^{さんのじょう}三之丞、中久喜^{ぎざもん}儀左衛門（助之進の次男）、広瀬^{たろうざえもん}太郎左衛門、それに又八の嫡男太田九八郎の面々である。

「織部はすべて受け入れた」と、又八が言う。

「少々、惜しい気もしますな。藩米の横領でござるよ、本来なら切腹もの、軽くてお役御免の上、蟄居謹慎。織部一派を始末するにはまことに好都合であったのだが・・・」不正を突きとめた奥平の言葉に若干の悔しさが滲^{にじ}む。

「お主の手柄であつた。ありがたく思っている。不満もあろうが、ここは儂のやり方を納得していただきたい。今、速やかにせねばならぬことは困窮した領民を救うことだ。織部の不正を暴いても、あの者たちの二百俵は飢饉米にはまわらぬ、藩の倉に入るだけだ。飢饉米にするにはあの方法しかない。三国廓からも手を引かせた。これで二百俵も確保できる。四百俵あれば当面の飢饉米としては充分であろう。彼の者たちの悪事を見逃したが、救済の目途が立ったとも言えるのだ。

お主の申すように事を公にすれば彼の者たちの罪は問える。だが、追い詰めれば織部らも必死になろう。争いが長引き藩内は混乱する。となれば飢饉救済にまで手が回らぬ。今、肝要なことは飢饉救済。織部一派の追及を見送り、手を打ったのはその為だ。貧民を救うことはできた。上々ではないか、それもお主が織部の悪事を暴いたおかげだ」又八は奥平を^{ねぎら}った。

奥平は納得せざるを得ない。

「御家老には参り申した」と、笑う。

「奴らの憎悪は並大抵ではありません。太田様に刺客が放されることも考えられます。見張りはより厳しくせねばなりません」又八に心酔している中久喜儀左衛門が言う。

「心配するな、奴らも見張られているのは察したはずだ。今しばらくは動きを見せまい。」

「万一ということもございます。御家老の警護は手前がお引き受けいたします」儀左衛門は家中一の使い手である。

「奴らがこのまま引き下がるとは思えぬ。必ず巻き返しにでるであろう、これからが本当の戦いになろう」刑部が言う。

「家中に彼の者たちに味方する者はほとんどおりませぬ」広瀬が言う。

「だが殿は別でござる。殿は織部を重宝されておられる」

(織部は常日頃より殿を享楽に誘い、歓心を得ている。たとえ奴への非難が家中で高まろうと、織部一派の処分を殿は許さないであろう) 刑部の心配である。

「刑部殿の申される通りでござる。織部は殿を頼りとするであろう。まあ、それも度を過ぎれば、自滅となろう」又八は微かに笑う。

「織部が自滅するとは、どういうこととござるか」源五右衛門が訊いた。

「奴が図に乗れば、周りが黙ってはいない」又八は言う。

「家中が騒いでも意に介さないであろうが。周りが・・周りが黙っていない、黙っていない・・・、なるほど、その通りですな。わかりもうした」と源五右衛門は頷いた。刑部も他の重役連中も意味を理解したのであろう頷いた。

「^{それがしら}某等とはんと分かりませぬが」と、三之丞が言う。

「いずれわかる。だが今は説明できぬ」と助之進は笑った。

「ともあれ、太田殿身边に気をつけなされ」と言う。

「分かり申した。気をつけます」又八が頭を下げた。

それから半刻ほどが酒席となり、会合は終わった。